平成１５年度英語教員指導力向上研修「授業改善プロジェクト」　　番号１５０３３

研究テーマ：英語で自分の気持ちを表現する力を向上させるための工夫

所属：高知県立佐川高等学校
氏名：小松桂子
ＲＧ　ＳＨ４

１　研究の背景

・文法事項の説明、練習問題の解き方の説明などは比較的わかりやすいと評価してくれる生徒が多い。

・いわゆる進学コースの生徒でもＷＲＩＴＩＮＧは欠点を取る子がおり、「英語は難しい」という意識を持たれている。また、教科書でやった問題は解けるが、その表現を使って自己表現をするには至っていない。

２　リサーチクエスション

・どうすれば、教科書の問題を解くのみにとどまらず、習った表現を使い、生徒が自分の身の回りのことや、自分の気持ちについて、ある程度まとまった（３０語以上）英文で書けるようになるか。

３　予備調査

（1）アンケート、授業評価の結果

あまり積極的ではないが、まじめに授業を受ける雰囲気は大切にしているクラスであると思われる。英語に苦手意識を持っているが、英語の必要性は感じている生徒が多いようである。英語での自己表現には興味を持ち、できるようになりたいと思っている生徒が多い。英語学習は、外国人とコミュニケーションや国際社会に出る上で必要と感じる生徒がいる一方で、自分には関係ないという消極的な意見も目立つ。教科書の内容にとどまらず、身近なことを表現したいという要求が高い事が伺える。（アンケートの質問項目および集計は別添え）

（2）授業観察の結果

既習事項（使役動詞の“ make ”“ let ”）を使って、自分で英文を試しに書かせてみたが、なかなか考えがまとまらなかったようだ。中にはかなり工夫して書いた生徒もいた。全員がまじめに取り組み、「自分で英文を作る」ことには躊躇なくチャレンジできたようである。

ただ多くの生徒は「参考」の例を見て文を書いており、感想に「語彙を増やすような指導をしてほしい」と書いたものもいた。「英文で書きたい、書いてみたい」という欲求はあるが、基本的な語彙の少なさ、定着率の悪さなどから実際に書くところに至っていないということが現実ではないだろうか。（指導案は別添え）

（3）生徒の自己評価（別紙参照）

４　仮説の設定

（1）仮説

仮説１：自分の身の回りのことに引きつけて文を考えさせれば、target sentence で出た表現を使って英文を書くことにも抵抗が少なくなるのではないだろうか。

仮説２：target sentence で習った表現を英作文に使う場合、場面をある程度設定してやると、自分で英文を考えやすくなるのではないだろうか。

仮説３：生徒の語彙の少なさを補うために、予想されるような単語や語句をヒントとして載せると、英文を書くことへの抵抗も少なくなるのではないか。

仮説４：自分で書いた文がみんなに紹介されたり、書いた文が評価の対象になったりすれば、生徒の意欲にもつながるのではないか。

（2）実践の方法案

・各 Lesson の target sentences を使い、WRITE YOURSELF というプリントで自己表現の導入にする。各自で一回は target sentences を使う機会を設ける。

・生徒が書いた文からよいもの、おもしろいものをピックアップし「作文紹介」としてプリントにする。

・定期テストに「自分で英作文」という問題を一問は入れる。その際に２０語以上、３０語以上などと字数を設定する。

５　計画の実践

１学期後半から２学期初めは、target sentences を使った一文を書くだけの task で WRITE YOURSELF をやらせた。例文を参照しながらではあるが、ほぼ全員が正しい形で target sentences を理解し、自分なりの文が書けるようになった。作文紹介も楽しみにしていた生徒が多かった。２学期の中間試験では、ソフトボール部の監督に登場してもらい、彼の気持ちになって英文を４つ作るという問題を出した。

中間試験後の WRITE YOURSELF には、初めて語数指定（２０～３０語）をして書かせることにした。

最終的に、英語で文集を作って卒業しようということを生徒に伝えることにした。生徒の反応は良くもなく悪くもなかったが、作ることに反対や拒絶反応はなかった。その前段階として、期末試験では語数設定をせず、２年半の高校生活を振り返る文を２文（よかったことと残念だったこと）書く問題を出した。

２学期の最後の WRITE YOURSELF は、「平成１５年度の３Ｃについて、まとまった文（３０語以上）を書きなさい」というテーマで取り組ませた。

６　実践の結果

２学期の中間試験の問題では、得点率７５％以上のものが１５名、５０～７５％のものが１２名、２５～５０％のものが９名、それ以下が１名（３７名中）という結果になった。習ったことを自分の力で応用して使うということは、半数以上の生徒に定着してきたようであった。

中間試験後の WRITE YOURSELF（初めて語数指定あり）の取り組みでは、例文、語句のヒントなどを載せたせいか、多くの生徒は２０語以上かけていた。２０語に足らない生徒も９名いた。まだまだ語数をクリアするまでには、実力がついていない状態だったといえる。

期末試験での問題では、完了不定詞の用法が定着してなかったため、得点率は７５％以上のものが１６名、５０～７５％のものが９名、２５～５０％のものが９名、それ以下が３名（３７名中）という結果になった。ただ、期末試験ではヒントを載せなかったので、その点ではかなり実力が上がった生徒もいると見てもよいと思う。

２学期の最後の WRITE YOURSELF については３８名中３５名提出（欠席、受験などで未提出あり）し、全員が３０語以上の英文を書いていた。

７　実践の検証

WRITE YOURSELF の取り組みを続けたことで、２０語、３０語という英文の課題にも躊躇なく挑戦できるようになってきている。９月、１０月には１０語程度の英文しか書けなかった生徒もいたが、１２月末には提出した全員が３０語をクリアできたということで、英文を作る場を数多く提供する事が大切だと分かった。「英語のシャワー」を浴びるのと同様に、生徒の心に書こうと思う「英語の噴水」を引く必要性もあるのだろう。

また、作文紹介も動機付けの一つとなり、宿題といってもさほどいやがらずに取り組めたように思う。このような点から、まとまった英文を書くことには抵抗がなくなっているようである。

ただ文法的な間違いはほぼ全員にあり、まだまだ「自分の気持ちを的確な英文で表現する」という所には至っていない。またヒントがあれば書けるが、ヒントがないと英文として成り立たないものを書く生徒が多い。ヒントがあるのは動機付けにはよかったが、実際の語彙力を高める工夫も必要であったと思われる。

８　成果と今後の課題

一番変わったことは、「英語で生徒の気持ちを引き出そう」という視点が持てたことである。「どうせ英作文なんか受験にいる子は少ないのだから、基礎問題ができたらいいや」という気持ちが、「大事なのは、表現する力をつけさせること」という気持ちに変わった。今後は生徒の前向きな気持ちに応えるよう、語彙を増やすことへの工夫にも取り組んでいきたい。そして英語の文集を完成させて、この生徒たちを送り出したい。